

## 媒介論的現象学の構想

——フッサールと共に、フッサールを超えて——

田口 茂(北海道大学)

フッサール現象学研究の現状を見ると、綿密なテキスト研究という点では、一定の到達点に達しているように思われる。しかしそれだけでは、フッサール現象学が本来もっていたポテンシャルが十分展開されているとは言えない。フッサールが本来思い描いていた現象学には、ある意味で素朴に、端的に、人々を共同作業へと誘うという側面があった。「事象そのものへ」という標語が、当初現象学を特徴づけるものと見なされてきたのは、そうした側面のゆえであった。初期の現象学に息づいていたこうした精神が、現象学研究の歴史的展開のなかで力を失ってきたことは否定できない。

ところで、そのような展開を妨げているのが、フッサール自身の語彙であるということも、否定できないように思われる。フッサールが用いる「主観性」と「意識」に関連する語彙は、それにいくら「超越論的」という形容詞を冠したとしても、やはり現象学を狭い意味での意識のなかに押し込めてしまうように見える。それによってわれわれは、現象学が本来問題にしていた「事象そのもの」を、容易に見失ってしまう。

現象学が、狭い意味での意識の外に、最初から出ているということ、これまでの現象学研究は十分に示してきた。「志向性」というものを正確に解釈するだけでも、この点は十分に理解することができる。「志向性」とは、いつもすでに、私の実的な体験を超えたものとの関わりであり、そこにおいて、われわれはいつもすでに間主観的で公共的な事態に関わっている。「志向的〈内〉は […] 同時に〈外〉である」(Hua XV, 556)。問題は、われわれが最初から意識の外に出ているという、この本来の意味で「自然な」事象そのものを記述する語彙が、自然的言語に欠けているという点である。それゆえフッサールは、たとえば「超越論的」という形容詞を用いて、既存の語に新たな意味を負わせることにより、暫定的に進んでいく方略を選択したのであるが、現代の現象学研究は、こうしたフッサールの暫定的方略を批判的に吟味し、それに対する修正提案を提出しうるところまで成熟しているのではないか。

もちろん、ハイデガーをはじめ、メルロ＝ポンティ、フィンク、パトチカ、マリオンなど、フッサールの現象学に対して、現象学の批判的改鑄を企てた哲学者はすでに多く出ている。だが、ここで提案しているのは、フッサール以外の「大哲学者」の研究に向かうとは別に、「小研究者」の共同的現象研究という初期現象学の精神を、部分的ではあれ、再び蘇らせることができないか、ということである。そのための「語り方」の検討が、まずなされるべきではないか。既存のフッサール現象学研究の枠組みを尊重した上で、その成果に対して、より適切な表現を提案し、相互に吟味していくことから、この作業を開始することができるのではないか。

ここでは、そのような一つの提案を行いたい。それは、現象学に「媒介」の語彙を導入するということである。フッサール現象学は、それを持ち出すことによって思考が停止してしまうような、行き止まりとも言える語彙を多く残している。「主観性」はその一つであるし、「本質」、「明証」、「自我」、「間主観性」といった語彙は、いずれも、それを持ち出すことによって話がより具体的になるよりは、「わかったようでわからない」ものに議論を投錨させてしまう面がある。しかし実際には、フッサールの現象学的分析は、こうした語彙を絶えず具体的な事象のなかに置き直し、具体的な事象をより明確に浮かび上がらせるための「媒介点」のようなものとして用いている。

現象学が、「行き止まり」となるような実体的なものを提示しようとするものではないということは、すでにこれまでの現象学研究が十分に明らかにしている。それにもかかわらず、上に挙げた「本質」「自我」「間主観性」等々の語の理解は、現象学をめぐるこれまでの言説において、どこか実体性を払拭しきれていない面がある。本稿では、これらの語からさらに徹底して実体性を抜き去り、これらの語をまさに「媒介」そのものの標題として理解することを試みる。

その際、筆者の発想の背景にある田辺元の「媒介」概念についても、簡単に示唆することにした。田辺は、一見自体的・無媒介的に成り立っているかのように見える存在者(有)を、それ自体「媒介的」な出来事として、媒介的現実がとる一つの形(空有)として受けとる。無媒介であるかのように見えるということそれ自体が、媒介の一つの形(媒介の自己否定態、自己疎外態)なのである。こうした発想に親和的な分析は、フッサール現象学の各所に見られる。本稿では、現象学のもつそのような側面をいくつか取り出してみたい。ここでは、限られた論点についてのごく概略的な議論にとどめざるをえないが、この考察が今後の議論のきっかけとして役立つことを期待したい。

## 1. 「媒介」という発想

まずはじめに、本稿を動かしていく基本的な発想について述べておきたい。すでに述べたように、フッサール現象学のなかには、それだけを取り出してみるときわめて抽象的で、経験には見出されないものを実体化したとも言われかねない概念が存在する。「超越論的主観性」にしても、「本質」にしても、「明証」にしても、繰り返しそのような疑念を呼び起こしてきた。だがフッサールは、これらの概念を天下り式に持ち出すわけではない。これらの概念をまず定義することから出発するのではなく、事象を具体的に分析するなかで、これらの概念がおのずからその意味を確定していくことを目指したのである。それゆえ、これらの概念の意味を知るためには、フッサールの具体的分析全体を参照しなければならないことになる。つまり、これらの概念は、さしあたり分析を進めていくための空虚

---

<sup>1</sup> 拙著『現象学という思考』（2014a）では、本稿と同じ問題意識から、物、本質、自我、間主観性などについてより詳細に論じているので、そちらも参照されたい。

な標題にすぎず、その内容は、経験の現象学的分析によって絶えず直観的に充実されねばならないのである。フッサールの高弟ラントグレーベは、次のように語っている。「フッサールにとって、諸々の概念は、理性にアプリアリに固有なものの解明＝展開（Explikation）ではなく、直観の内実を呈示するための単なる示唆であり、補助手段にすぎない。そこから、フッサールが導入するあらゆる概念の暫定性と解消可能性が由来するのであり、それらを再び撤回する可能性が絶えず存立しているのである」（Landgrebe 1973, 322）。

このようなフッサールの言葉の使い方を考えてみると、彼の思考がすでに「媒介的」な特徴をもっていることが見えてくる。フッサールは、直接に何かを固定しようとはしない。言葉の意味を浮動させたままで、それをわれわれ自身の経験の探究と結びつけ、言葉と言葉の手前にある経験へと媒介しようとする。個々の思考する者は、経験を自ら探索するなかでさまざまなものに出会うが、フッサールの現象学は、概念をそのような経験と絶えずつきあわせることによって、概念がおのずと形をとってくるのを待つのである。そのようなフッサールの概念は、それだけで自立しえず、絶えず媒介的に成り立つという特徴をもっている。

それゆえ、フッサールが用いている現象学的概念を生かすためには、「～とは何か」という定義的な問いだけで済ますわけにはいかない。それがいったい何と何を媒介しているのか、それがいかなる媒介的事態を名指す標題であるのか、と問うていく方が、はるかに得られるものは多い。

このような問い方は、そもそも現象学を特徴づけるものである。日常のなかで、あるいは科学において、あるいは哲学のなかで、われわれが出会う様々な概念について、現象学は、それが「何であるか」ではなく、それが何を媒介し、何によって媒介されているかを問題にする。フッサールの思考と抽象的な観想的思考とを対比しながら、レヴィナスはこの点を鋭く指摘している。

「それ [抽象的な観想的思考] は、対象を発見しながらも、対象へと導いた諸々の道を知らない。だがこれらの道こそ、その対象の存在論的場所を形づくっている。つまり対象は、そのような〈存在〉からの一つの抽象物にすぎないのである。現象学的手法は、これらの接近の道を——通過され忘却されたすべての明証性を——再発見することにある。これらの接近の道が、それらを超出するように見える対象の存在論的重みを測る尺度となる」（Levinas 1967, 116）。

この箇所ではレヴィナスはヘーゲルに言及している。「自体」を思念する抽象的思考を、具体的なものへと連れ戻し、具体的なものに再び結びつけるような思考が念頭に置かれているのである。レヴィナスは、ここでフッサールの思考の「媒介的」特徴に留意しているといっている<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup> ただしレヴィナス自身は、こうした「媒介的」思考を十分に踏まえた上で、媒介を欠いた他人との関係を主題化しようとしている。たとえば以下を参照。「他人は、単にコンテクストから出発してわれわれに到来するだけでなく、媒介なしに、それ自身で意味するものである」（Levinas 1967, 194）。

ここで本格的にヘーゲルに言及する余裕も力量も筆者にはないが、ここでの発想の背景となった田辺元の媒介思想について、一言言及しておきたい。田辺によれば、無媒介的なものは、媒介の自己忘却態、自己疎外態である。無媒介的なものを媒介の対立物と見るのではなく、無媒介的に見えるものは、媒介が自己を隠蔽し忘却する仕方でも成立している姿を示しているのであって、それもまた媒介の一様態であると考えてるのである<sup>3</sup>。

この発想の利点は、それが具体的な事象分析を駆動する装置になりうる点である。通常は、自体的、無媒介的なものに出会ったら、それ以上手の出しようがない。それは、それだけで成立しているのだから、「ただある」だけであって、思考はそれをただ前提するしかない。そこで思考は停止してしまう。だが、田辺の「媒介」の発想に従うなら、無媒介的に見えるものに出会ったとき、そのこと自体を思考の媒介として生かすことができる。「無媒介的に見える」ということ自体が、忘却された媒介の姿であり、そこに媒介が成立しているしるしなのである。

まず何か無媒介的・自体的なものがある、それからそれが媒介されるのではない。いわば媒介の働きの方が先である。媒介の働きが、「ある」と言いうるような端的な無媒介性をはじめて成立させているのである。「何か」として固定しうるようなものは媒介の効果としてあるとさえ言ってもよい。媒介の背後に、それを成立させる実体を想定する必要はない。媒介こそが絶対的なものである（これが田辺の言う「絶対媒介」である）。

この考えは、背後に想定される実体的なものから、いまここにある相対的・偶然的なものを導出するような思考を排する。むしろある意味で、相対的・偶然的なものの決定的な意義を露わにする。今ここにあるものが、相対的でありながら、それ自身媒介としてあるがゆえに、まさしく媒介的現実の比類のない実証となるのである。

ここには、目の前にあるものを問題にしなから、目の前にあるものだけにとどまらない思考がある。目の前にあるものを問題にすることが、そこから眼を逸らすことなく、それを飛び越えることなく、ただちに〈目の前にあるものを超えたもの〉を問題にすることになる。筆者には、現象学がこのような思考のあり方を体現しているように思えてならない。以下では、このような観点から、フッサール現象学に見られるいくつかのトピックを、別の言い方で書き換えてみることを試みたい<sup>4</sup>。

## 2. 「物」と物の現われ

まずは「物」（Ding）について考えてみたい。日常において、端的に直接的な確かさを示そうとするとき、われわれはしばしば「物」に訴える。物は端的に、直接的＝無媒介的に

<sup>3</sup> 田辺の「媒介」概念については、拙論 2014b, 113 頁以下も参照。

<sup>4</sup> 田辺とはまた異なった源泉として、筆者は新田義弘の「媒体性」の概念にも刺激を受けている。新田 2001, 第三部参照。ただし、筆者の試みは、新田の哲学的に彫琢された「媒体性」概念よりも浅いレベルで、媒介的な発想を現象学の各所に生かすことができないうか、という可能性を探るものにはすぎない。

存在しているように見える。だが、現象学的分析は、そのような物そのものが、必然的に「射映」(Abschattung)と呼ばれる変化する多様性においてしか現われえないことを示した。物の全面が一举に、静止した全体として現われることはありえない。物はいつもある一面においてしか現出しない。たとえば、箱を回転させると、上面、側面、下面などが次々に現われる。しかし、それらすべてが同時に現われることはない。また、上面と側面が一緒に見えることはあるが、上面と下面が一緒に見えることはない。一面的現出が次々に展開するなかで、それぞれの物は、ある規則的な構造を示す。この連続的に展開する現出の規則的構造こそが、そこに「物」と言いうるような何ものかを現出させるのである。つまり、「物そのもの」は、そのつど変動する多様性に媒介されることによってしか現出しえない。「物」とは、むしろこの「媒介」の多様な局面が、一つの明確な構造を形づくるという出来事それ自体を指すと言ってもよい。このような媒介なしに、われわれが「物そのもの」に直接出会うということは、思考不可能な事態なのである。

さて、そうすると、「物そのもの」を媒介している多様な「現われ」(Erscheinung)は、どのようなステイタスをもつのか、が問題になる。「現われ」とは、単に主観的なものにすぎないのであろうか？ 現われを超えた「物自体」に直接出会うことがありえないというのは、われわれが自分の主観的体験から出られないということの意味するのであろうか。

このような問いから発する観念論と实在論との論争に、現象学は絶えず巻き込まれてきた。しかし、現象学の具体的分析は、上記のような問い自体が、一種の疑似問題であることを示しているのではないか。

一方で、「現われ」とは「主観的」なものでもある。物はまさに私に対して、われわれに対して現われているのであって、その現われは、われわれにとって具体的に体験されているのである。他方で、「現われ」とは、それが物そのものの現われを意味する以上、「単に主観的なだけ」のものではありえない。それはまさしく客観的な物そのもの「の」現われなのである。何らかの仕方で現われることにおいてしか、物そのものを問題にすることはできない。何らかの仕方で物が「客観的」にありうるとすれば、物がそのように客観的なものとしてあるということ自体が、「現われ」において成立しているのである。

このように、「現われ」は、「主観的か客観的か」という二者択一的な問いには馴染まない。むしろ「現われ」とは、それ自体が「媒介」そのものであると考えられる。主観的なものと客観的なものとがまずあって、しかるのちにそれらが関係するようになるわけではない。「現われる」ということがまずあって、その「現われる」という事態のなかに、ほかならぬ客観的な物が姿を現わすと同時に、それを体験する働きも含まれているのである。「現われる」というただ一つの事態のなかに、主観と客観は最初から相互に媒介された仕方で見出される。「現出」(Erscheinen)というただ一つの媒介的事態の構造契機として、はじめて主観的なものと客観的なものとが、互いに対する差異を通じて固有のあり方を獲得する。

そう考えるなら、主観的なものと客観的なものとの区別を抽象的な仕方で絶対視することなく、かといって両者を無差別に同一視することもなく、両者が相関し合う現象を具体的に分析していくことが可能になる。観念論と实在論という抽象的枠組みを外から持ち込

むことなく、そこにある具体的現象をそのままに分析することが可能になるのである。それは現象学が、その自己解釈の如何にかかわらず、実質的にはすでに遂行してきたことである。媒介的な語り方は、その現象学が実質的に達成してきたことに、より適切な表現を与えうるように思われる。

このように考えるなら、「志向性」と呼ばれるものも、すでに一つの媒介現象であることに気づく。また、「構成」（Konstitution）とは意識による「創造」なのか「意味形成」なのかというかつての論争に対しても、「構成」とは一つの媒介現象にほかならないと答えることができるだろう。「構成」とは、そのなかでのみ客観的なものが自己を露わにするような、主観的に生きられたプロセスを言い表そうとするものだとすれば、主観と客観の対立から出発して「構成」を位置づけようとするよりも、「構成」という媒介的事態から出発して、そこに主観的なものと客観的なものの不可分の相互媒介を分析していく方が、現象学的な思考のふるまいとしてはより自然であると言えるだろう。

### 3. 「明証」の媒介性

ここで「明証」もまた、「現われ」と同じく媒介的な性格をもつという点を指摘しておきたい。明証は主観的なのか、客観的なのか。どちらでもあり、どちらでもない。明証は確かに、主観的に体験されるものである。しかし、単に主観の内部から出られないものではない。それは、そこにおいてまさに客観的な真理が真理として現われる出来事である。何か「真である」ということの体験が明証なのであり（Hua XVIII, 193）、この出来事を一方的に主観の側にも客観の側にも割り振ることはできない。むしろ明証とは、媒介的な事態なのである。こう捉えれば、主観的とも客観的とも決められないという明証のキマイラの性格は、むしろその媒介性格の素直な表現となる。明証とは、まさに主観的体験と客観的真理との媒介そのものを意味するのであり、この媒介的事態なしに、客観的真理が自体的に存立していると考えられることもできないし、客観的真理から切り離されて、主観的体験がそれだけで存立しているということもない。「明証」という媒介的事態から出発して、その運動に従うことにより、はじめて客観的真理と言いうるものが姿を現わしてくる。それは同時に、真理を一步一步体験のなかで確認していくことでもある。明証が明証自身によってのみ訂正されうるということは、明証の死んだような自己同一性を意味するものではなく、それがつねに媒介の運動であるということの意味しているのである。

それゆえ明証は、経験のなかで、様々な局面の「間」で際立ってくる。一つの局面から次の局面へと移ろうとするとき、われわれはしばしば何かを確かめようとする。道具を持ち換えるとき、われわれは道具をまさぐり、その感触を確かめようとする。道を渡ろうとするとき、車が来ないことを確かめ、しかるのちに道を渡り始める。確かめて明証が得られないとき、次の局面に移ることはできない。車が来ないかどうかいつまでも確かめつづ

---

<sup>5</sup> Hua XVII, 164; Tugendhat 1967, 106; Wieglerling 1984, 152.

けていたら、道を渡ることはできない。確認がうまく行ったということは、むしろ道を渡るといふ行為に移ることができたということからわかる。明証は、どこまでも確かめつづけることによって得られるのではなく、むしろ一つの行為から次の行為に移れるということ、それらの間の媒介として機能することにおいて、成立している。明証とは、経験の行き止まりではなく、経験を展開させる媒介として機能するのである。

#### 4. 「本質」の媒介性

さて次に、「本質」について一言しておきたい。「本質直観」は、しばしば非現象学者から奇妙な主張として排撃され揶揄されてきた。そうした場合に思い浮かべられているのは、現象学者が、一つの対象として無媒介に、自体的に存在している（虚空に浮かんでいる）「本質」を直接凝視しているかのようなイメージであろう。これに対して、「本質」の所与性がつねに基づけられた（fundiert）所与性であること、具体的な経験なしに本質だけが単独で虚空に浮かんでいることはないこと、などを現象学的分析は示してきた。しかしそれでも、「本質」という独特の所与性について適切な理解を形づくることは、現象学者にとっても容易ではない。「本質」という対象性が自立的な対象性として「見える」かのようなイメージを払拭することは、現象学者にとっても容易ではないのである。

このような状況は、「本質」の媒介的な本性を提示していくことにより、改善されうるように思われる。たとえば「赤の本質」は、現われてくる個々の赤いものなしには、空虚な言葉でしかない。個々の赤いものが、「いずれも赤である」ということ、同じく「赤である」ようなものが、原理的には無限にありうること、が見抜かれるとき、そこに「赤」という本質について語る可能性が生じてくる。このとき、「赤の本質」は、複数の（あるいは無数の）赤いもの同士の関係のなかにしか、現われてこない。つまり、複数の赤いものは、それぞれ単独で自体的に成り立っているのではなく、相互に媒介される仕方で現われている。その相互媒介のあり方こそ、「本質」という言葉で名指されている事態なのではないか。

赤いものが赤いものと、そしてまた別の赤いものと関係し合うとき、それらを不可避的に結びつけてしまうような一つの同じ観点が生じてくる。それらは「赤」という点で一つに結び合ってしまう。これをフッサールは、『経験と判断』において「連合」（Assoziation）の現象として描いている（とりわけ第三篇第一章を参照）。すなわち、現出する諸現象は最初から相互媒介において現われてくるのであり、この相互媒介がある一つの「不変項」（invariantなもの）をいわば媒介の交叉点としてもつとき、それが「本質」という言葉で呼ばれるのである。

つまり「本質」とは、原理的に媒介的な事態を指しているのであり、この媒介は限定的・局所的ではなく、むしろ無限の時間・空間に関わる媒介に対応している。これが「どこにもあり、どこにもない」（überall und nirgends）と呼ばれるイデアールな対象の存在様態に対応する。時間や空間と無関係に、「本質」なるものが自体的に存立しているというわ

けではない。フッサールは、イデアールな対象の存在様態が、やはり一種の時間的様態、すなわち「遍時間性」（Allzeitlichkeit）という時間的様態にほかならないということを強調している。これを、全時間点の媒介関係の一樣態を表すものと受け取ることができる。いかなる時間点と時間点、いかなる空間点と空間点とが関係しあっても、「赤」という点ではそれらの間に差異が生じないような媒介のあり方が、「本質」という言葉で表現されている媒介のあり方なのである。時間・空間的な差異を無効化するようなタイプの媒介と言ってもよい。時間・空間的な差異がないからといって、「媒介がない＝無媒介である」ということにはならない。むしろ、差異を無効化するからこそ、非局所的な、汎通的な媒介を可能にすることができるのである。このような媒介の普遍性を見抜いたとき、われわれは「本質を洞察した」と言いうる。

## 5. 媒介点としての自我

さて、いま見てきたように、「本質」とは、同じものが同じものと結びつくという現象を、その相互媒介の一樣性という面から言い表したものであると考えられるが、もう少し緩く、似たものが似たものと結びつくという現象もある。これは「類型」（Typus）という現象に対応する。様々な犬の類似性の経験は、犬の類型を生じさせるが、同じ犬でもかなり異なった種類の犬がありうるように、「類型」に属する個別例にはかなり緩やかな幅がある。われわれが対象を経験するときには、このような緩やかな幅をもった類型が、つねに様々なレベルで働いている。一つの対象をまったくゼロから経験するということはわれわれにはほとんどできない。何かを経験するとき、そこにはつねに何らかの類型的予料が働く。机のようなものを見れば、私のなかでは、もうすでに机の類型が動き出しており、見えなくても下には脚が四本あるだろうとか、取っ手のついた部分は引き出しであろうといった予料が、暗黙のうちに働いている。そのような類型的予料は、日常的生においては、大部分確証されていく。類型形成の力は非常に強力であり、われわれの経験は、至るところで類型を形成しつつ、それにもとづく予料を確証することによって、ますます類型の支配力を増大させながら進んでいる。そのおかげで、われわれは日常生活の習慣的行為において迷うことが少なくなるのである。

しかし、類型的予料が確証されない場面が全くないわけではない。時に、その予料は裏切られる。眼の前のドアに付いている突起は、ドアノブのように見える。私はそれをドアノブの類型によって捉え、ドアノブならば回せるはずだ、という予料のもとに行動する。だが回すことはできない。類型的予料は裏切られる。そこではじめて、われわれは類型的予料から離れることを強いられる。ドアノブの類型にこだわるかぎり、私の行動はそれ以上先に進むことができない。ドアノブの類型が期待させることをその物が充たさない以上、私はその物に対して、類型的なドアノブに対するのとは異なった態度で接するほかはない。私はそこではじめてその物をよく見、よく調べて、それが何であるのか、それがどんな類型に属するのを見ようとし、場合によっては新たな類型を形成しようとするのである（そ



れは単に壊れているのかもしれないし、日本のドアノブは回せるが、ドイツのドアノブは回らないものがあるといったことに気づくかもしれない）。

このような、類型的予料が崩される瞬間、習慣的な行動が乱される瞬間にこそ、能動的な「自我」の意識が呼び出される<sup>6</sup>。そこでは、「私」が事態をよく見て、判断し、選択する必要がある。そこでは、ある類型的予料を見限って、別の類型的予料に乗り換える転換が行われる。この転換の瞬間においては、類型的に敷かれたルールがいったん取り外され、様々な類型的枠組みから「私」がいったん切り離されて、「自由」に何かを選択し投企する、という出来事が起こる。類型的予料がスムーズに確認されているときにはほとんど意識されない「自我」が、このような危機的な瞬間には、表面に押し出されてくる。一つの類型が別の類型に切り替わるとき、「私」はその切り替えを担うものとして、あるいはその少なくとも一部として意識される。もしそうであるとすると、「私」はまさに「媒介」として呼び出されると言ってもよいのではないか。一つの類型が別の類型へと切り替わるとき、「私」はその切り替えを「媒介」する機能の一つとして浮上してくるのである。「どうすべきか」という決断を迫られるときに、「私」が強く意識されるのもそのためである。

もちろん「私」は、そのような危機の瞬間にのみ機能しているわけではなく、能動的・顕在的自我として浮上していないときにも、潜在的に機能している。だがそれも、独特の媒介機能として解釈することが可能である。

自我は、「いつでも同じ自我である」という側面をもつ。こう言うと、自我という実体的なものが、時間を貫いて同一のまま存在している、というイメージをどうしても抱いてしまう。だが、そのように考える必要はない。眠り、そしてまた目覚めたときに、私は自分が「同じ私」であると思う。眠る前の瞬間と、いま目覚めた瞬間との間には時間的距離があるが、眠る前の私と目覚めた私との間には、距離がない。ここでも、眠る前の瞬間と目覚めた瞬間との間の転換・媒介関係を考えてみると、この媒介は、時間的距離は保存するが、私と私との距離はつねにゼロにするような機能を果たしていることがわかる<sup>7</sup>。私の生の各瞬間は、単独で切り離されているわけではなく、相互に媒介されて成立している。それらの中には、時間的には様々な距離があるが、それらに含まれる「自我」の間には距離がゼロになるような変換関係が成立している。このように見るならば、実体的な自我が存立していると考えなくても、実質上、「自我はいつでも同じ自我である」と言いうる。フッサールが、「純粹自我は空虚であり、内容をもたない」と言うとき<sup>8</sup>、そこで考えていたのは、生の各瞬間のもつ形が、それらの相互媒介において、ある同型的な重なりをもつという構造的な関係のことだったのである。

この構造的な一点が「同じ」にとどまるがゆえに、各瞬間の間に、通路ができる。この「同じ」一点を媒介として、各瞬間が通じ合うことができるのである。それゆえ、自我は

<sup>6</sup> Hua XI, 51-64; EU 347-352, 366f., 372 に関連する叙述がある。マトゥラーナは、「反省とは確実性を手放すことだ」と言っている（Maturana 2013, 34）。反省と自我が浮上するのは、自明的に安住していた確実性が危機に瀕する瞬間である。

<sup>7</sup> それゆえフッサールは、純粹自我は時間的に「延長していない」という（Hua XIV, 43）。

<sup>8</sup> Hua III/1, 179 参照。拙著 2010, 92-94 頁をも参照。

過去を想起することもできるし、未来を予期することもできる。また、現実と空想との間を、自由に行き来することもできる。生の各契機の間を自由に繋ぐことができる媒介点こそ、「自我」なのである。

## 6. 自我の媒介的動性と間主観性の「相抗う統一」

しかし、自我は媒介点でもあるが、個体的に限定するものでもある。自我はいつも「今」と「ここ」にいる。自我は過去にも未来にも現実にも空想にもアクセスできるが、自我自身の居場所は「今ここ」の現在なのである。私は過去のことを思い出す。そこで私は、あたかも過去の自我と一体化しているかのように、過去の世界を体験している。だが、過去の自我と完全に一体化することはできない。過去の世界が現在として体験されるわけではないからである。各時点の自我は、同じ自我である以上、距離なく一つに重なり合うのであるが、それにもかかわらず、「そのつどの自我」、「現に体験する自我」としては、一致し得ず、そのつど異なるのである。私は、過去の私の視点からも世界を見ることができし、空想上の私の視点から、現実には存在しない世界を見ることができし。これらすべての自我の視点に、私は距離なしに一致しうると同時に、現実の私は、あくまで今ここにいる「この」私以外ではありえず、過去の私でも、空想上の私でもない。このように自我は、自らの内に合致と差異を同時に抱えている。自我においては、一性と多性とは静的に区別された二者択一ではなく、自我は「一であり多である」という、一点における振動的分散を生きている。ここにも一つの媒介現象が見られる。一なる自我と、多なる自我とが別々にあるのではなく、多なる自我が、多でありながら一点において媒介されて存在するという動性こそ、「自我」と呼ばれるのである。

「他の自我」についてはどうであろうか？ フッサールは、たったいま述べた一と多の媒介現象、差異と合致が重なり合った出来事とよく似た仕方で、間主観性についても論じている。「驚くべきことに、私は他者を、私との合致においてのみ直観的に見出しうるのであり、他者の体験を、私の体験との拮抗においてのみ [...] 直観的に見出しうる」（Hua XIV, 141）。私と他者は、合致しつつ拮抗し合う。他者が一つの自我であることがわかるのは、その自我性を、ある意味で私はあたかも自分の自我であるかのように生きてしまっているからである。これは、高次の能動的比較によるものではない。私が自我であることそれ自体が、もうすでに自我であるというその一点において他の自我と受動的に重なり合ってしまった。自我を意識するより前に、自我であることはもうすでに一つの媒介として働いてしまっている。ただしもちろん、そこで経験されるのはあくまで「他の」自我である。自我であるという点で重なり合うからこそ、他の自我の他性がより先鋭的に際立つ。逆に、自我と物はその芯において重なるところがないがゆえに、かえって物は鋭い他性を欠くのである。

このような他の自我との関係をフッサールは、他なる自我との「相抗う統一」（Widerstreitseinheit）とも呼んでいる。「他なる自我は、私との合致のうちにある。すなわ

ち、私との相抗う統一のうちにある。[…]二つの他なる主体がいるとき、私はいずれの主体にも私自身を『置き入れ』、あたかも彼の作用を遂行し、彼の体験を体験するかのようである。ここで「様々な主体を」比較することは、それぞれの主体と私との合致によって媒介されているのである」（Hua XIV, 143）。それゆえフッサールは、「比較は合致にもとづく」という。主体と主体とを比較して、はじめて合致が確かめられるのではない。一切の比較に先立って、われわれは主体同士の重なり合いを生きてしまっているのであり、それにもとづいてはじめて、諸々の主体を客観的に比較することも可能になるのである<sup>9</sup>。

自我と他者がまずあって、それからそれらが（比較されうるような）関係に入るわけではない。重なり合いつつ互いにはじき出し合う「相抗う統一」こそ、自我と他の自我との原関係であり、いわばこのきわめて密度の高い特異点から逃れ出る仕方でのみ、自我は「自らに固有のもの」を安定した仕方で確保することができる。だが、そのようにこの原関係から逃れ出ながらも、自我は自らの中心あるいは源泉を、この原関係の内にもたざるをえない。「自我である」ということは、自体的で無媒介的な出発点ではなく、この原関係によって媒介されてのみ成立する。

晩年のフッサールは、「原自我」（Ur-Ich）という標題のもとに、このような原関係を「志向的変様」という動的出来事そのものとして探究しようとした<sup>10</sup>。ここではもはや詳述することができないが、「自我」と「間主観性」と呼ばれるものもまた、「それ自体」として端的に成り立っているようなものではなく、ある特別なタイプの「媒介」を言い表すものとして解釈されることが、示唆されえたのではないかと思う。

〈まず多数の自我が存在し、次いでそれらの自我が互いに関係し合い間主観性を形成する〉のではない。むしろ間主観性という媒介的事態こそがより基本的な事態であり、この媒介的事態から抽象的に分離する仕方でのみ、孤立的な自我を想定することができる。そのような諸々の自我が自立的に存在するかのようにならざるに思わせているのが、間主観的媒介の働きである。しかし、間主観性それ自体は媒介の働きにすぎないから、いかなる実体的存在も持ち合わせていない。自我が自立的にあるように思われるとき、そこにはすでに間主観性が媒介として働いているが、間主観性は媒介にすぎないから、それ自体を捉えようとしても何も捉えられない。だからこそ余計、自我の方が自立した存在であるかのように見えてくる。しかし、「完全に孤立した自我」が抽象的にしか思考不可能であることも明らかである。自我的主体が現実に見出されるのは、いつもすでに具体的な間主観的関係においてである。いかなる実体的根源も根底に置くことなく、自我と他の自我とを、その重なり合いと響き合いという生き生きした動的媒介から考えることが要求されている。現象学的な思考法を徹底するなら、自我と間主観性に関しても、そのような媒介論的な捉え方に至らざるをえないように思われる。

<sup>9</sup> 以下も参照。「他なる主体は、もしそれがそもそも私に与えられているとすれば、ただ合致においてのみ与えられているのであって、私はわざわざ比較する必要などない」（Hua XIV, 143）。

<sup>10</sup> 拙著 2010, 第六章参照。また、少し別の角度からではあるが、後期レヴィナスがこうした原関係をどう描いているかを、拙論 2012 で論じているので、参照されたい。

## 7. 結語

以上、きわめて雑駁な内容ではあるが、現象学で語られてきた様々な概念から、隠れた実体性を払拭し、それらを「媒介」の言語で語り直していく可能性について論じてきた。そのような可能性を、少なくとも議論の俎上に載せたとすれば、本稿の意図はある程度果たされたことになるだろう<sup>11</sup>。

## 文献

Edmund Husserlの著作は、*Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Werke*, Den Haag/Dordrecht 1950ff. から引用した。Huaという略号を用い、ローマ数字で巻数を、アラビア数字で頁数を示した。また、*Erfahrung und Urteil*, Hamburg 1972 を EU という略号で示した。

### その他の文献

- Landgrebe, Ludwig (1973): „Ist Husserls Phänomenologie eine Transzendentalphilosophie?“, in: Noack, Hermann (Hg.): *Husserl*, Darmstadt, 316-324.
- Levinas, Emmanuel (1967): *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, J.Vrin, Paris.
- Maturana, Humberto (2013): *Fundamental Relativity: Reflections on Cognition and Reality*, München.
- Tugendhat, Ernst (1967): *Der Wahrheitsbegriff bei Husserl und Heidegger*, Berlin.
- Wiegerling, Klaus (1984): *Husserls Begriff der Potentialität. Eine Untersuchung über Sinn und Grenze der transzendentalen Phänomenologie als universalen Methode*, Bonn.
- 田口 茂 (2010) : 『フッサールにおける〈原自我〉の問題』法政大学出版局
- 田口 茂 (2012) : 「「私」の定義としての「身代わり」——主体の唯一性と留保なき普遍性をめぐって」, 『現代思想』40-3, 総特集レヴィナス, 208-223頁
- 田口 茂 (2014a) : 『現象学という思考 ——〈自明なもの〉の知へ』筑摩選書
- 田口 茂 (2014b) : 「田辺元 ——媒介の哲学・第二章」, 『思想』第1089号, 103-124頁
- 新田 義弘 (2001) : 『世界と生命 ——媒体性の現象学へ』青土社

Shigeru TAGUCHI  
*Ideas Concerning Phenomenology of Mediation*  
— *With and Beyond Husserl*

<sup>11</sup> 本稿は科学研究費補助金・基盤研究 (C)「現象学の媒介論的展開」による研究成果の一部である。